比較文化研究所年報

第 15 号

2021

目　次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

比較文化研究所の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

活動報告（2020 年度）
１.研究部会報告
（1） 地域博物館研究部会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（2） 文化財保存科学研究部会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（3） 外国語教育研究部会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
（4） 福祉コミュニティ研究部会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（5） 地域精神保健福祉研究部会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（6） 心理教育研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
（7） 日本アジア比較文化研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
（8） 歴史科学研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
（9） 筑後川流域圏研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
（10） イスラーム研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
（11） 地中海地域研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
2. 研究員発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
3. 日誌(運営会議、研究所会議等)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

施設・設備 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

はじめに

比較文化研究所長
原口　雅浩

2021 年度の活動報告として、久留米大学比較文化研究所年報第 15 号をお届けします。
本研究所は文系大学院の設置母体として出発し、主に比較文化研究科設置に貢献するとともに教育・研究をも担ってきました。その後、2001 年から専門研究部会が設けられ、当初の 5 部会から 16 の研究部会にまで増え、現在の活動に至っています。それぞれの研究部会では、調査研究、そして地域にも開放された公開講座、シンポジウムやセミナー等の様々な研究活動を行っているところです。

これまでも比較文化研究所としての学際的・総合的研究活動の推進と、成果の社会還元を続けてきましたが、今後も一層の共同研究の進展は必要であると考えられます。

本研究所の活動が、所員や地域の方々を始め様々な関係者に支えられてきたことに感謝申し上げ、今後とも関係各位の皆様のご指導、ご支援を頂きたく宜しくお願い致します。

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987 年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（現在の比較文化研究科長）が兼任しておりました。

その後 2001 年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も大学院担当教員を中心にその他の希望する専任教員にまでその枠が広げられました。

研究所では、多くの研究部会を組織しそれぞれのテーマで活発な研究活動を行うとともにその成果の公開に努めています。

ほかに研究所としての活動として、次のような研究プロジェクトを実施してきました。

まず、2006 年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究」を開始しました。2006 年度～2007 年度においては、大川地域、2008 年度～2009 年度においては旧三潴郡、2010 年度～2011 年度においては旧久留米市、2012 年度～2013 年度においては、うきは市および朝倉市、2014 年度からは日田地区を実施し、それぞれの地域の『研究報告書』を発行してまいりました。

以上の研究プロジェクトは 2015 年度をもって終了しています。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。

2021 年度においては次のような組織・体制となっております。

組織体制

所　　長	原口　雅浩（2021.4.1～2023.3.31）
専任所員（任期制）	Ahmed M F M Rahmy（教授）（2017.4.1～2022.3.31）
所　　員	2021 年度：80 名（専任所員 1 名含む） 大学院比較文化研究科後期博士課程の教員 24 名 大学院心理学研究科後期博士課程の教員 6 名 任意に加入する助教以上の教員 49 名
特別研究員	2021 年度：5 名
研究部会研究協力者	7 名 （文化財保存科学研究部会 6 名、筑後川流域圏研究部会 1 名）
研　究　員	2021 年度：16 名

専任所員は、講師以上の教員で、任期制をとっています。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2021 年度における研究部会は以下の通りです。

1)　地域社会経済研究部会（部会長　松石達彦教授）
2)　地域博物館研究部会（部会長　吉田洋一教授）

3)　文化財保存科学研究部会（部会長　大庭卓也教授）
4)　外国語教育研究部会（部会長　李　偉教授）
5)　福祉コミュニティ研究部会（部会長　濵﨑裕子教授）
6)　地域精神保健福祉研究部会(部会長　辻丸秀策教授)
7)　民事法研究部会（部会長　石川真人教授）
8)　健康文化研究部会(部会長　鍋谷　照教授)
9)　欧州研究部会（部会長　児玉昌己教授）
10）心理教育研究部会（部会長　園田直子教授）
11）会計専門職研究部会（部会長　杉野博貴教授）
12）日本・アジア比較文化研究部会(部会長　アハマド・ラハミー教授)
13）歴史科学研究部会（部会長　福山裕夫教授）
14）筑後川流域圏研究部会（部会長　浅見良露教授）
15）イスラーム研究部会（部会長　佐々木拓雄教授）
16）地中海地域研究部会（部会長　池口守教授）

研究員は、後期博士課程を満期退学した者で、その後も研究を続け博士学位論文の作成を目指す者等が含まれます。指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

＜審議＞
比較文化研究所には、主として次の 2 つの審議組織があります。
研究所会議 : 所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する審議を行います。
運営会議 : 所長、専任所員、研究部会長からなる組織で、16 名の委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な審議機関となります。
また、学部等との連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、副学長、学部長、大学院研究科長、専任所員の教授を含む所員の教授 5 名によって組織されています。

＜研究成果の公表＞
『比較文化研究』
研究所の紀要として原則として年 1 回発行しています。1987 年に『比較文化研究所紀要』第 1 輯を発行し、1993 年発行の第 14 輯からは『比較文化研究』と改称しています。
また、2009 年度より査読制をとっております。
第 58 輯の主な内容は、以下の通りです。

『比較文化研究』第 58 輯(2022 年 3 月発行)
［論文］
シリーン・エルモタセム
「道徳」と「象徴表現」の有効性について
―芥川龍之介とエジプトの作家カーメル・エルキーラーニーの童話の比較を通して
［研究ノート］
辻丸秀策
特異な人格変化と部分健忘を来したアルコール症の臨床ノート

許　東升・辻丸秀策
認知症高齢者の家族介護に関する研究　―家族介護者の語り分析を中心に―

許　東升・辻丸秀策
中国における高齢認知症ケアに対する施設介護職員の現状に関する研究
長春市の民営高齢者介護施設職員に対するアンケート調査を基に

三橋優介・辻丸秀策
居宅介護支援事業所の主任介護支援専門員の役割における現状と課題
―管理者へのアンケート調査のテキストデータ分析より―

『比較文化研究所年報』(本冊)
比較文化研究所における1年間の研究成果の報告および学外への周知を目的に、2008年度(2007年度の報告)より発行を開始しました。

各研究部会・研究員の研究成果の公表
各研究部会などにおいても出版物等による研究成果の発表が行われています。詳細につきましては、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。なお、新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大により、フィールドワークや対面での人的交流が制約を受け、十分な活動ができなかった部会もあります。
また、研究員につきましては、2006年度から年度末に研究所セミナー(活動報告会・交流会)を開催し、その年度における研究成果の発表が行われています。2021年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の現状を鑑み、昨年同様、開催しないこととしました。研究員研究発表会についても開催しないこととしました。ただし、次年度の研究員継続にあたっては、発表を必須条件としているため、「抄録」原稿の提出をもって、これに代えることとしました。

活動報告（2021 年度）

１．研究部会報告

（1）地域博物館研究部会

部会長　吉田 洋一

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、歴史的環境を保持しながら地域文化の次世代への継承を目的としている。

運営（研究）計画

①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）
③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2021 年度の活動報告

①史料調査

2016 年度より御井図書館所蔵の久留米藩政史料（仮）の調査を継続中である（詳細は『久留米大学比較文化研究所年報第 10 号』2017 年、参照）。

【2021 年度調査実績（調査年月日：人数）】

2021 年 4 月 17 日(土):5 名、5 月 22 日(土):5 名、6 月 19 日(土):3 名、9 月 25 日(土):6 名、10 月 23 日(土):5 名、11 月 27 日(土):4 名、2022 年 2 月 26 日(土):3 名、3 月 27(日):6 名

参加者一覧…吉田 洋一（本学文学部）、小澤 太郎（本学大学院生）、杉谷 善子（本学研究生）、藤木 郁名（本学学生）、中川 壽賀子（八女市立図書館）、翁長 亜紀・松永 華子・西本 紗也（御井図書館委託職員）

②史料調査の成果（例）

小澤 太郎「久留米藩海軍の終焉」（久留米大学大学院『比較文化研究論集』第 42 号、2021 年 10 月）（内容抜粋）久留米藩は内陸に位置する藩にもかかわらず、幕末には薩長土肥に次ぐ七隻もの洋式船を所有していた。この幕末久留米藩海軍に関する研究は、浅野陽吉『梅野多喜蔵先生伝』（1937 年）をその嚆矢とする。本稿では、近年存在が明らかになった国立国会図書館アジア歴史資料センターが公開するデジタル・アーカイブズの史料を中心に取り上げ、これまでの研究では詳細に論じられることがなかった廃藩置県以降の同藩海軍艦船の動向について考察した。旧久留米藩所有の艦船は、新たに成立した久留米県（1871 年 7～11 月）のもと、七隻の軍艦のうち雄飛丸（長さ 45.5㍍）・遼鶴丸（同 25.3㍍）は売却、千歳丸（青龍丸、同 56.4㍍）・翔風丸（同 26.8㍍）・玄鳥丸（同 27.0㍍）は商船への転用を図ったが、明治 5（1872）年には青龍丸・翔風丸・玄鳥丸の所管が三潴県（1871 年 11 月～1876 年）から大蔵省（当時）へ移ることが決定した。本稿での検証により、記録が残る青龍丸については、大蔵省駅逓寮（郵便業務を担当）大阪出張所を経て、明治 5 年 9 月までに品川沖へ回航したことが判明した。この直前の 8 月には、半官半民の「日本国郵便蒸気船会社」が設立されており、明治新政府は旧諸藩の艦船 10 数隻を同社へ払い下げることを決定している。

2022 年度活動計画

- 筑後川流域圏及び有明海沿岸地域を中心とした現地調査や史料の探求・公開、外部講演などの成果を、学生や市民へ還元する。
- ニューズレターの発行

（2）文化財保存科学研究部会

部会長　大庭　卓也

リーフレット作成

伝統工芸の国・筑後　第三号
　井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話を聴く（一）
伝統工芸の国・筑後　第四号
　井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話を聴く（二）

　籃胎漆器は、竹を編んだものを素地として漆を何度も塗り重ね、編み目の模様を研ぎ出したもので、久留米が誇る伝統工芸のひとつである。
　本リーフレットは、筑後地方の真竹を用い自身の工房で籃胎漆器を制作し、「日本製」を守り続ける、籃胎漆器塗師の井上正道氏からうかがったお話を紹介したものである（三部作のうちの二部）。

DVD アーカイブ製作

文化財科学研究部会が過去 20 年間に行ってきた活動を 27 種類の DVD にまとめました。
久留米大学御井図書館に 1 セット寄贈しておりますので、ご覧になりたい方は、御井図書館でお尋ねください。

アーカイブNo	日付	タイトル	備考
1	2006 0529	中野三敏先生自宅訪問	
2	2006 07	八女伝統.松延･松枝	
3	2007 03	古本と虫(前編･後編)	(2枚組)
4	2008 01	研究部会1月定例	
5	2008 0315	高山栄一･松尾和紙工房	
6	2008 0315	藍菌	
7	2008 0517	文化財保存学会上宮先生発表	
8	2008 1130	クララ農家･溝田和紙･藍生庵	
9	2009 0214	定例会2月定例	
10	2009 0801	研究部会定例クララ	
11	2009 1201	伝統和紙作り	
12	2010 0227	久留米耕を作る藍菌	
13	2010 0227	生紙と染色紙の保存性	
14	2010 0312	松枝家を訪問	
15	2010 0626	文化財保存定例会	
16	2010 0806	筑後優品	
17	2010	八女手漉き和紙	
18	2011 0331	中野-和本リテラシー	(2枚組)
19	2011 11	鈴木 文化財修復と和紙	
20	2011	匠の記録	
21	2012 0612	文化財保存とIPM	
22	2012	八女極薄和紙を漉く(日本語イタリア語)	(2枚組)
23	2012	藍匂い立つ(日本語･イタリア語)	(2枚組)
24	2013 0618	久留米大 カビ対策	
25	2014 013	久留米大文学部公演全3回	(3枚組)
26	2015 0315	久留米大講演イタリアと日本	
27	2021	松枝哲也さんを偲ぶ	(3枚組)

文化財保存科学研究部会 WEB サイト更新

文化財保存科学研究部会の活動に関する情報は、WEB サイトをご覧ください。
URL：http://kurumebunkazai.jp/

（3）外国語教育研究部会

部会長　李　偉

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグランドの人間教育をモットに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2021 年度は、久留米大学外国語教育研究所と共催し、「中国雲南省における少数民族の文化変容と保存―モソ（摩梭）人の祭日を中心に―」というタイトルで講演会を実施した。金縄初美　西南学院大学国際文化学部教授に講師としてお願いした。参加者は本学教員、非常勤講師及び他大学教員計 21 名であった。

演　題：**中国雲南省における少数民族の文化変容と保存**―モソ（摩梭）人の祭日を中心に―
日　時：2021 年 12 月４日　木曜日　14：00～15：30
場　所：久留米大学福岡サテライト（エルガーラオフィス６F　601－602）
　　オンライン(Zoom)同時開催
講演者：金縄初美　西南学院大学国際文化学部　教授

講師略歴

2006 年　西南学院大学大学院文学研究科博士後期課程修了・博士（文学）
2008 年　西南学院大学言語教育センター　助教
2009 年　北九州市立大学外国語学部中国学科　准教授
2013 年　西南学院大学国際文化学部　准教授
2015 年　西南学院大学国際文化学部　教授

専門分野

文化人類学、中国語教育

講演内容

中国雲南省では、1980 年代より「民族観光」が推進されたことにより、多くの少数民族地域において社会形態や経済状況に変化が生じた。

観光開発が進んだ少数民族地区では生活環境が大きく変容し、文化的側面においては、伝統文化継承者の減少などの問題に直面している。しかし一方では、持続可能な観光開発が模索され、文化財保護が地域社会を活性化させる有効な手段として注目されるようになり、各種活動が行われている。

講演では、1980 年以降の少数民族の文化変容と保存活動の状況について、講演者が 2019 年に現地調査を実施した少数民族モソ人居住地を具体例として取り上げ、その中でも特に、婚姻家庭、信仰形態、生活環境などが融合された形で体現される「成人式」や「転山節（山神祭祀）」などの祭日に関する変化に焦点をあて、祭日が地域活性化とも関連をもちながら再構築されていく過程について考察した。

(4) 福祉コミュニティ研究部会

部会長　濵﨑裕子

本年度も子ども食堂の活動を通して、福祉コミュニティのあり方を考察する研究を行った。これまでの継続的活動に基づき、新たに見出された知見は以下の３点である。

１）　コロナ禍における子ども食堂の新たな意義が見出された。
２）　母子家庭を主な対象とする活動では、食事提供を越えた福祉活動の展開が考察された。
３）　久留米大学キャンパスの「つながるめ」で学生主体の子ども食堂を実践でき、コミュニティにおける大学生の役割が確認できた。

以下にその内容を詳述する。

コロナ禍でも活動を継続している団体は、弁当配布とパントリー（フードバンク等からの支給品の配布）である。弁当は予約制であるが、その申込者は次第に増加していく傾向がある。その理由として考えられることは、当初は弁当を申し込むこと自体が、保護者が困窮している（経済的のみならず多様な課題を抱えている）ことを告知するようで控えていた家庭も、申込者が増え、活動継続により地域で日常化することにより、自分たちが目立つことなく申し込めるようになったことである。これは生活のしづらさを抱えている家庭を地域から排除しないという社会的意義がある。

また、集団で食べていた時には見えなかった子どもとその家族の課題が、弁当配布による個別の関わりを通して察知できるようになり、行政や福祉機関につなげる道筋が開けたことの意義は大きい。ソーシャルワーカーのアウトリーチ機能に匹敵するが、身近な地域住民が運営する子ども食堂だからこそ可能なことである。

子ども食堂の主催者は、公民館活動を行っている人が中心であったが、コロナ禍で公民館が使えないために多くは休止状態である。しかし、一般社団法人やボランティア団体は、独自の活動スタイルで引き続き実施している。中でも注目される「じじっか」は、ひとり親家庭の子どもが「血縁がなくても親のように見守り、愛してくれる大人が周りにいる環境」をつくり、その活動の一環として「親子食堂」がある。報道されているように、コロナ禍において女性が社会的弱者である日本の現状が顕在化した。それでも前向きに子どもを育てようとする母親たちが集まり、知恵やパワーを出し合って多様な活動を行なっている。レクレーションや習い事など、余裕のない母子家庭の子どもが体験できにくいことを、皆で集まって行なっている。子どもたちは、兄弟や学校以外の「じじっか」仲間で育ちあっているようにも見受けられる。そこで得るものは、彼らが社会に出たときの「生きる力」になるのではないだろうか。

大学の演習の中で、学生が地域の子ども食堂に出かけ、そこでの体験を活かして、自分たちで子ども食堂を企画・実践した。福祉コミュニティ研究部会は、以前から御井校区の子どもを通して、地域とのつながりを作る活動を展開してきたが、今回の子ども食堂の実践は、その新たな形と見ることもできる。地域連携センター「つながるめ」のシェアキッチンを使って調理し、つながるプレイスを学生の臨機応変なアイデアで使いながら、夏休みの宿題を持ってきた子どもたちに関わり、相互に楽しむことができた。御井小学校の全校生徒に、学生が作成したチラシを配布したが、予想外に申込者が少なかった。前述したように保護者の方が「子ども食堂」を貧困と結びつけて考えていたようである。しかし、実際に参加した子どもたちの保護者から、子どもが大学生と交流することの楽しさを自宅で語り、とても喜んでいるという報告を受け、学生が活動目的としていたことが達成できたと評価できる。久留米大学にとっても初めての試みであったが、福祉コミュニティ研究部会の活動にとっても新しい一歩を踏み出すきっかけになると考える。

（5）地域精神保健福祉部会

部会長 辻丸 秀策

今年度は以下の成果が得られた。

特異な人格変化と部分健忘を来したアルコール症の臨床ノート（辻丸秀策）

特異な人格変化と部分健忘を来したアルコール症を経験したので、その症例を呈示して、臨床的な解釈と若干の論究を加えた。人格は、①自我脆弱性の亢進、②刺激増幅性の亢進、③場依存性の亢進、④神経質の 4 つの因子が多少にかかわらず認められた。つまり攻撃性の強い外罰型と、少なからず小心内省的な内罰・依存的な性格傾向が同時に認められ、元来の性格が変化を来していた。健忘については、心理検査や画像検査及び経過から、コルサコフ症候群類似の部分的健忘があり、同時に、精神病理的側面から診た場合、解離性健忘を併発していると思われた（比較文化研究所掲載）。

「小中学生の QOL と問題行動（SDQ）に関する研究：子どもの自殺対策に関する考察」（池田）

子どもの QOL と子どもの自殺予防の関連性について、BPS モデルを用いて説明した。本論文の統計分析（第 2～5 章）によって、QOL の総合値である「QOL 総得点」が子どもの問題行動（SDQ）と最も相関しており、「QOL 総得点」を上げることは、BPS モデルの視点で、生きることの包括的な支援につながると捉えている。

しかし、子どもの自殺に関する先行研究などにおいて、BPS モデルの視点を示唆する内容はみられるが、子どもの自殺予防に寄与する方策について BPS モデルの視点で明確に言及した報告はほとんどされていない。

ゆえに、「自殺対策基本法」(2016) で述べられている「生きるための包括的支援」を行うためには、BPS モデルの視点で QOL を高めることの重要性が示されている点が、大きな意義と考えられる（博士（保健福祉学）取得）。

（6）心理教育部会

部会長　園田直子

心理部会で 2021 年度に実施した活動内容を報告します。本部会では「協同教育研究会」と銘打って協同教育に関する研究会を続けています。今回は第 52 回から第 55 回までの活動内容を報告します（安永　悟）。

以下に報告する研究会は、いずれも日本協同教育学会（九州支部研究会）および全国個集研（久留米地区研究会）の公認を受けています。また研究会終了後、参加者同士の交流を促すために「情報交換会」を開催しました。なお、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、研究会と情報交換会は、すべてビデオ会議システム（zoom）を用いて実施しました。

1. 第52回 協同教育研究会

テーマ：「LTD話し合い学習法」　　日　時： 2021年8月28日(土)
主　催： 協同教育研究所「結風」　　後　援： 久留米大学比較文化研究所
プログラム：

(1) 挨拶・導入：		14:00～14:20
(2) 解説：LTD授業モデル	安永悟・久留米大学	14:20～15:05
(3) 実践：LTDを活用したディベート	須藤文・久留米大学	15:20～16:50
(4) 連絡・閉会：		16:50～17:00
○オンライン情報交換会		17:00～17:30

総　括：

今回の事前登録者は43名でした。当日は42名の参加を確認できました。参加者は、いつものように全国からの参加があり、所属と専門は多様でした。ただ、今回は一つの学校から10人を超える参加者があったことは特記に値します。協同学習に取り組むという学校として方針のもと、多くの教員が同じ研修に参加するということは、FD活動として大きな意味があります。

研究会の内容はLTD授業モデルの解説と、LTD授業モデルの習熟段階で取り上げられるLTDに基づくディベートを体験しました。

情報交換会には19名の参加者があり、研究会の感想に加え、今後の活動について活発な情報交換がおこなわれました。

2. 第53回 協同教育研究会

テーマ：「要約・作文トレーニング」　　日　時： 2021年12月04日(土)
主　催： 協同教育研究所「結風」　　後　援： 久留米大学比較文化研究所
プログラム：

(1) 挨拶・導入：		14:00～14:40
(2) 研修：わかる力を育てるための要約・作文トレーニング	坂東実子・敬愛大学	14:50～16:40
(3) 何でも相談会	須藤 文・久留米大学	16:40～16:55
(4) 閉会・連絡		16:55～17:00
○オンライン情報交換会		17:00～17:30

総　括：

今回のメインであった坂東先生の「わかる力を育てるための要約・作文トレーニング」では、坂東先生がこれまで開発してきた多様な教材を用いながら、「わかる力（読む力）」と「わかりやすく伝える力（書く力）」を育む要約練習、および、わかったことを自分の体験・知識に結び付け、新たな問題意識を提示してまとめる400字作文の練習を体験することができました。実際に授業で使ってい

る多くの教材を用いた研修により、参加者は自分の指導内容を振り返ることができたと同時に、新しい視点からの授業づくりに取り組むきっかけとなりました。
　研究会への参加者は42名で、情報交換会には19名の方が参加しました。

4. 第54回 協同教育研究会

テーマ：「社会的構成主義」　　日　時： 2022年1月22日(土)
主　催： 協同教育研究所「結風」　　後　援： 久留米大学比較文化研究所
プログラム：
　(1) 挨拶・導入：　安永悟・久留米大学　14:00～14:45
　(2) 講演：私的な能力から関係による学びへ：　14:55～15:55
　　社会的構成主義がひらく教育の可能性
　　鮫島輝美・京都光華女子大学
　(3) 連絡・閉会：　15:55～16:00
　　〇オンライン情報交換会　16:00～16:30
総　括：
　今回の研究会は、協同教育研究所「結風」で過去1年近くわたって開催してきた「ガーゲン研究会」の成果を、より多くに皆さんに知っていただくために開催しました。まず、安永から、ガーゲンの社会的構成主義の視点から「集団と個の関係」を再度吟味しました。
　また鮫島先生による講演「私的な能力から関係による学びへ」では、ガーゲンの社会的構成主義から見た教育の可能性について示唆的な話を聞くことができました。そこでは「学びとは、経験と知識を関連づけ、新たな関係＝気づきによってその地平を広げていくような活動です。今求められている学びとは、社会構成主義が提案しているような、これまでの当たり前を一旦横において学びほぐし、新たに現実と対話しながら構築し直していくプロセスが大切です」との主張が印象に残りました。
　今回の研究会への参加者は46名で、情報交換会には18名が参加しました。

4.第55回 協同教育研究会

テーマ：「協同学習の技法」　　日　時： 2022年3月12日(土)
主　催： 協同教育研究所「結風」　　後　援： 久留米大学比較文化研究所
プログラム：
　(1) 挨拶・導入：　13:00～13:20
　(2) 講演：協同学習の技法：ケーガンストラクチャー　13:20～14:55
　　関田一彦・創価大学
　(3) 連絡・閉会：　14:55～15:00
　〇オンライン情報交換会　15:00～15:30
総　括：
　今回は日本協同教育学会の事務局長を務めている関田一彦先生に、ケーガンストラクチャーについて、その基本的な考え方と活用法についてお話をいただきました。協同学習では広く行き渡っているケーガンストラクチャーについて学び直すことができました。
　今回の研究会への参加者は38名で、情報交換会には25名が参加しました。

（7）日本アジア比較文化研究部会

部会長　神本秀爾

2021 年度は部会員による例会活動を中心におこないました。

Ⅰ　例会活動

１　年度計画打ち合わせ　　7 月 16 日

２　第１回越境研究会　　9 月 22 日
テーマ：小説「戦中日本を生き抜くエジプト人少年の物語」
発表者：アハマド・ラハミー
テーマ：詩「家庭安産の勧め」
発表者：浦田義和

３　第２回越境研究会　　10 月 27 日
テーマ：レゲエとラスタファリ思想
発表者：神本秀爾
テーマ：アフガニスタン
発表者：古賀幸久

４　第３回越境研究会　　12 月 15 日
テーマ：絵画について
発表者：吉田勇輔
テーマ：新型コロナ禍のもたらした経済社会と地域づくり
発表者：伊佐淳

Ⅱ　資料調査（12 月 25 日～28 日、浦田義和）

東京都大田区立大田図書館にて離島関係資料調査、
新島村博物館にて移民関係資料調査

（8）歴史科学部会

部会長　福山裕夫

2021 年度の歴史科学部会は、2 年目のコロナ禍の中でフィールだワークに至ることもなく、公開講座の開催、その関係者、共同研究者らと議論と感染流行の合間にタイムリーに行うことのできたリモート参加による活動となった。

タイムリーに行うことのできた（もしくは休止）公開講座の内容は以下のとおりである。

１）郷土の歴史民俗学　　(Oct.24～Nov.7,2021)
　古代の日月食についての文献的考
　記紀における豊国・筑紫国
　柳田国男と海の遺伝考古学一近年の知見から
　星の和妙抄　―渡来した海の民―
２）九州王朝論の昨今　　(Oct.3～10,2021)
　「吉田の緑歯国考
　古代戸籍に記された超・長寿の謎　―古今東西の超高齢―
　弥生史観の変遷と日本神話
　改めて確認された　博多湾岸の卑弥呼の宮
３）九州王朝論を「日本書紀」を題材に聖徳太子の謎を解明する　　(Oct.2～23,2021)
　九州王朝論の原理
　肥後の歴史と観光
　継体天皇と緯半島の歴史　―毛人・鍛夷の世界―
　聖徳太子と隋の煬帝
４）九州王朝論を「日本書紀」を題材に検討する　　(Sep.4～25,2021)
　ヤマトタケルの時代
　神功皇后と日本の古代史
　景行天皇とヤマトタケル
　神功皇后と九州王朝
５）邪馬台国と九州王朝論　　(Jun.5～26,2021)
　九州王朝論とは何か
　筑後の歴史と観光資源
　邪馬台国と神武東征
　欠史八代と神武天皇

また、講演者、共同研究者らによる出版は、以下である。
古代に真実を求めて――俾弥呼(ひみか)と邪馬壹国(やまいこく)―
古田武彦『「邪馬台国」はなかった』発刊五十周年
April.2 2021 明石書店　ISBN10　4750351814

2022 年度になるが、上記のテーマについての簡易な解説にもなる下記も出版予定である。
古代に真実を求めて――古代史の争点―
「邪馬台国」、倭の五王、聖徳太子、大化の改新、藤原京と王朝交代―
April.22 2022 明石書店　ISBN10　4750353787

（9）筑後川流域圏研究部会

部会長　浅見良露

筑後川流域圏研究部会は、筑後川流域圏を対象として、多方面から研究を行う事を目的としている。2006 年度から 2015 年度は、比較文化研究所のプロジェクト研究として、下流域から上流域までの地域研究を行い、2016 年度に研究部会として再発足してからは、流域圏の一部または全体について、メンバー各自によるテーマ別の研究を行っている。さらに、2019 年度に「古賀河川図書館」の全蔵書が久留米大学御井図書館に寄贈されるにあたって、その活用を考える研究会をスタートさせた。

2020 年度においては、「古賀河川図書館の利活用を考える会」をオンラインとの併用で開催、また、3 件のテーマ別研究が行われた。

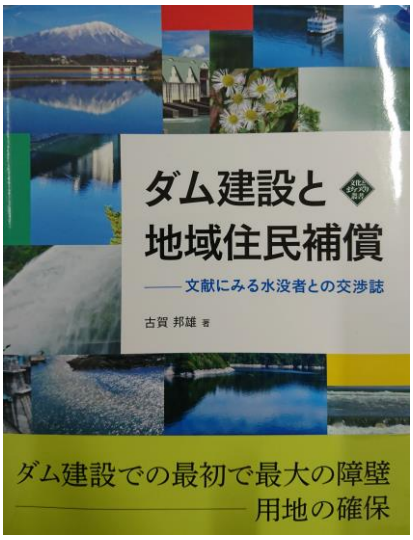
1. 古賀河川図書館の利活用に関する研究　土肥勲嗣

(1) 古賀邦雄河川文庫の活用を考える会についての会

2021 年 8 月 2 日（月）15 時から御井本館 3 階第 2 会議室

出席者：浅見、伊佐、浦田、河内、土肥、畠中、葉山、松下

古賀邦雄氏による著書『ダム建設と地域住民補償　文献にみる水没者との交渉誌』水曜社、2021 年)が出版されたため、紹介する研究会の具体的な提案がなされた。



(2) 古賀邦雄河川文庫の活用を考える会準備会

2021 年 10 月 14 日（木）午後 6 時半から午後 7 時半、御井本館 3 階第 2 会議室、出席者：浅見、土肥、葉山

古賀邦雄氏の著書の読み合わせをおこなった上で、11 月開催の案内方法、実施要領について打ち合わせを行った。学外参加者にもオンライン（Zoom）で公開することが決まった。

(3) 古賀邦雄河川文庫の紹介

2021 年 11 月 21 日（日）朝倉市のサンライズ杷木で開催された「第 18 回ふくおか水もり自慢！in 杷木」において、古賀邦雄氏と土肥は、御井図書館の古賀邦雄河川文庫を「温故知新」というタイトルで紹介した。

(4) 古賀邦雄河川文庫の活用を考える会（オンライン対応）

2021 年 11 月 26 日（金）午後 6 時半から午後 8 時まで御井本館の会議室と学外からオンライン（Zoom）でつないで「古賀邦雄河川文庫の活用を考える会」を開催した。

出席者：浅見、伊佐、浦田、河内、古賀邦、古賀幸、土肥、葉山、松下　福田、工藤

古賀邦雄さんが出版されたご著書について報告をしていただいたうえで、学内外から多くの質問が寄せられた。特に、ダム建設に伴う水没者交渉についてなど意見交換がおこなわれた。また古賀邦雄河川文庫の活用方法について、学外者から書誌情報の掲載など具体的な提案があった。学外からは、オンライン（Zoom）で全国から大学関係

者、行政関係者、市民団体などから 20 名弱の参加者があった。
追記：久留米大学御井図書館ホームページの OPAC(蔵書検索)の「所在」の項目に「古賀邦雄河川文庫」が設定され、配架されたすべての書籍を検索することができるようになった。

2. テーマ別研究

(1) 鍋島幹夫研究　　浦田義和

鍋島幹夫は、詩壇の芥川賞とも呼ばれる新人の優れた現代詩の詩人の詩集に与えられる H 氏賞を、その詩集『七月の鏡』で 1999 年度に受賞した詩人である。
鍋島幹夫は、1947年八女市黒木町に生まれ、大学卒業後一時期の関東での教師生活を経て、1975年頃に帰郷し、故郷の小学校で教師を続けながら、詩作に励み、3冊目の詩集で H 氏賞を受賞し、その後下関の大学に勤め始めて程無く、2011年に64歳で亡くなった。
この詩人の詩作の営為に照明を当てることは、現在の日本現代詩の特徴を把握することにつながるだろう。
このような趣旨で、福岡県詩人会筑後地区(幹事、浦田)と久留米連合文化会の共催で、次のようなイベントを実施した。

2021 年度　筑後・詩の集い

第一部　没後 10 年　鍋島幹夫―人と作品
　ゲスト:渡辺玄英(元梅光学院大学、日本現代詩人会)
　対談:渡辺玄英　X　浦田義和(久留米大学、福岡県詩人会)
　人となりを語る:山本源太(星野焼源太窯、福岡県詩人会)
第二部　鍋島さんの思い出、自作詩朗読
　福岡県詩人会会員、飛び入り歓迎
　日　時:2021 年 11 月 7 日(日)14時～16時
　会　場:文化センター共同ホール

対談の内容は、以下のとおりである。
渡辺玄英氏は、鍋島詩の特徴を、象徴詩であるから、言葉の意味を取ろうとするのは鍋島詩の解釈では無効だと述べた。また、作者が表現しようとしているのは、現実の再現ではなく、個人を超えた、ある普遍を表そうとする実験であると述べ、幻覚を通して、「空」のスクリーンに何物かを描こうとしているシュールな詩だと述べた。
浦田は、鍋島詩は、意味を取ろうとするとはぐらかされ、イメージがまとまらない。その表現行為は、試行錯誤に留まっているのではないか？　三詩集の詩語を分析すると、風景としては、乾いた「風」や「空」「天体」、人称は「ぼくら」、身体表現は「血」、感覚表現は「叫び声」が多く使われている。それらは、表層的、記号的な感じである。しかし、たとえば絵本の詩「ぼくのそら」では、リフレインがリズムを生み、「ふかくなる　ぼくのそら」と、何か意味を志向しているように感じた、と述べた。
山本源太氏の協力により、鍋島詩表現をつかむヒントとして、鍋島さん制作の DVD「七月の鏡」が上映された。この DVD は、ソ連の監督アンドレイ・タルコフスキーの映画「ストーカー」の場面や、宮本隆司の廃墟の写真集「建築の黙示録」の写真、フランスのベルナール・ファコンのマネキンの写真、「飛べなくなった人」を描いている石田徹也の絵、実験演劇の勅使河原三郎の写真などをバックにして「七月の鏡」の中の詩を人工音声で流す映像であり、総じて人が生身をうしなった(惨劇の)、その後の無機質な世界が表現されていた。

(2) 朝倉豪雨災害から学ぶこと　　河内俊英

朝倉豪雨災害地の現地を何度か見に行ったが、朝倉市内の土砂災害地は約 450 箇所と広範囲にわたる。人的被害は、死者 32 名、行方不明 2 名、負傷者 16 名。住家被害は、全壊 260 件、大規模半壊 119 件、半壊 664 件、一部損壊 428 件に及ぶものであった。
災害を起こした河川は、いずれも短く急勾配であり、洪水時には途中がせき止められて自然ダムになり、それが崩壊して下流を襲うことが繰り返されたようである。旧松末小学校では、児童の一部は

帰宅できなくなり、当初体育館に避難計画したが、３階教室で一夜を明かして無事であった。被災当時体育館を見たが、土砂が大量に流入していたことから、教室避難を選んだことは、賢明であった。

災害復旧工事は、5 年間と期間が決まっていて短期間に行う必要があり、住民の希望を丁寧に聞いて行うには難しい面があるようである。今回の朝倉では、工事関係者が、地元住民と現地の山間地の被災現場を一緒に見て歩き、打ち合わせの機会を持ったことが短期間で同意を得ることに役立ったと言う話を聞いた。一般的に役所の計画は、机上で勝手に造る印象が強いが、現地を一緒に見て歩いて話を聞いたことが感情的なトラブル回避に効果を発揮したようである。

朝倉豪雨災害では、筑後川水系佐田川・寺内ダムが運よく貯水量が少なかったことで、ダム放水無しに、大量の流木を止める事が出来たことは、良かった、ただ 2017 年から 5 年間の寺内ダムへの計画高水流量は、150 年に 1 回の流入量に達しており、近年雨の降り方が大きく変化してきたことが心配される。

(3) 筑後川流域圏の地方創生～e スポーツの利活用と地域開発の可能性～　　松下　愛

筑後川流域圏の地方創生の一つの手段として e スポーツの利活用と地域開発の可能性として考察を行ってきた。e スポーツの国内市場は 2018 年の約 48 億円が 22 年に倍増するとされ、高額賞金の大会も相次いでいる現状がある。また、高校生大会の設立や部活動への導入など若年層にも広がりをみせる一方、世界保健機関（WHO）が 2019 年、ゲーム障害を依存症認定するなど弊害も指摘されている[1]。自治体との連携については例が少なく e スポーツにおいての連携には高齢者の参加の可能性も考慮して慎重に取り組むべきこともわかった。また、e スポーツだけではなく仮想空間による地方創生の可能性も探求していくことを計画している。そのはじめとして各自治体（うきは市、大川市、小郡市）と学生に対し仮想空間の講演会、勉強会を行った。（2021 年 12 月 15 日、久留米大学にて）まだまだ、仮想空間も各自治体においても認知度が低く近未来的な地方創生までには各自治体での理解と連携した挑戦が必要であることが分かった。

「e スポーツもしくは仮想空間による筑後川流域地域、および次世代型観光へ他関心のある地域への地方創生の提案」としては、具体的な取り組みとしては学生とともに、自治体への「e スポーツ勉強会、仮想空間勉強会」を開催した（2022 年 1 月 19 日、久留米大学にて）。具体的な政策の提案方法を検討していった。学生からは、「e スポーツ、仮想空間を用いた地域活性化の提案」において e スポーツや仮想空間の活用案が提示され、自治体からアドバイス・意見をもらった。

今後実践に移していくためにメリット・デメリット等について整理し課題と実践可能性について勉強会を開催する必要があると考える。以前からの提案（準備会議の内容、地域との連携・政策提言）を各自治体と協力して、それぞれの地域事情に合わせて変化させつつ現代の地方創生へとつないでいきたい。

[1] 出所：「e スポーツ普及へ 福岡で発足、産学連携の研究組織-西日本新聞-2020/2/16」https://www.nishinippon.co.jp/item/n/584471/（取得日 2022 年 3 月 30 日）

（10）イスラーム研究部会

部会長　佐々木拓雄

令和元年度から計画していた九州在住イスラーム教徒コミュニティーに関する実地調査は、新型コロナウイルス感染拡大の影響にともない翌年には中断され、令和３年度においても、諸条件が整わないため、活動を再開することができなかった。東京で日本在住ムスリムをめぐる類似の研究を進めようとしているグループがあり、簡単な情報交換のみ行うことができた。

外部講師を招いてのシンポジウムも、予定したものがありながら、冬期の感染拡大にともない中止となった。各メンバーとも個別の研究テーマに沿った活動に専念する１年であった。

（11）地中海地域研究部会

部会長　畠中昌教

１　部会活動

2021 年度もコロナ禍で海外の研究者の招聘も海外への渡航もできず、活動が大幅に制限されたが、部会内での共同研究の可能性を探るため、2022 年 2 月 21 日（15：00～17:00）に ZOOM を利用したバーチャル講演会を開催した。

講演会は、龍谷大学政策学部の阿部大輔先生による「バルセロナにおけるツーリズムとポストコロナ/脱成長を目指す政策」という題目であり、スペインのバルセロナを事例として、最近の観光拡大やパンデミックによる都市空間の激変について、歴史的経緯、現在の状況、今後の展望について講演いただいた。

本講演会は、オーバーツーリズム、独立運動、コロナ禍を経験したスペインのバルセロナ市を事例として、バルセロナの都市再生の経緯、オーバーツーリズムの展開と政策的対応、ポストコロナの都市政策について紹介する内容であり、部会員や参加者と講演者による活発な議論が行われた。

本講演の内容は、2022 年度に予定されるスペイン関係の講演会と合わせて文字化を行い、比較文化研究所より刊行予定である。

２　部会メンバーの研究成果

「日本近代文学と地中海」（浦田義和）

科研テーマ「日本近代・現代文学におけるイスラーム表象研究」での調査において閲覧・収集した大分県出身作家野上弥生子『欧米紀行』関係資料を分析し、特にエジプトについて、過去の栄光に比較した現在の欧米に圧迫されているエジプトの悲惨を指摘している点、イスラーム信仰の敬虔さ真剣さと聖典解釈の自由を許さないかたくなさへの着目など、1930 年代における日本作家のエジプト認識の一例が分かった。

「スペインにおけるワインツーリズム」（畠中昌教）

科研テーマ「ワインツーリズムの空間的展開と地域の変容に関する総合的研究―スペインを事例にして」」による現地調査において収集した資料を分析した。対象地域は、スペインのワイン生産地域である DOC リオハ、DO シガレス、DOP カンガスの３つである。その結果、これら対象地域においてワインツーリズムにおける持続可能性への取り組みを検討したところ、リオハ・アラベサ・ワインルートのみが持続性関連の認証制度を導入していた。また、DOC リオハは地域内に３つのワインルートを有するが、これはワイン生産地域である DOC の範囲と、ツーリズム政策などの権限を持つ自治州の境界がずれていること、自治州間で政治や文化に違いがあることなどが理由であった。

２．比較文化研究所　研究員発表会（2021 年度）

例年、研究員による研究発表会を年に１回開催しておりましたが、2021 年度は新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、研究報告書の提出をもって発表に代えることといたしました。

	研究員氏名	タイトル
1	今村　義臣	地域在住の高齢者における来世信念と脳形態画像解析 －相関分析による縦断的検討－
2	陳　　宥蓉	インドネシアにおける再生可能エネルギーへの転換についての考察
3	阿　　思根	S 型湾農牧業発展における影響要素分析とその対策
4	赤須　大典	集団成員からの肯定的評価の実感が及ぼす集団成員への同一視と己高揚への影響
5	篠倉　大樹	近世の水害における久留米藩への石高被害の算出
6	髙木　恵	律令期の国府・国分寺の立地に関する一考察 －自然災害（歴史地震）の痕跡をもとに－
7	天満　翔	象徴機能から見た自閉スペクトラム症のロールシャッハ 反応
8	吉良　晴子	事例研究報告：小児がん患者・家族への心理的援助と スピリチュアルケア
9	藤原　綾子	地域の脱炭素化に向けた地方公共団体の実行計画制度等に係る現状と課題－再生可能エネルギーの導入の観点から－
10	若杉　優貴	書店チェーンの経営破綻が大型商業施設に与えた影響 －国内の大都市近郊に立地していた中堅 2 社の店舗を事例として－
11	池田　博章	中学生における QOL と内面化・外面化問題行動（SDQ）の縦断的研究
12	田中　京子	語りの中で生じる自伝的推論と高齢者の適応
13	城戸　由香里	認知症介護の看取りにおける皮膚刺激の活用 －皮膚刺激を行う職員の態度・感想・展望の要因－
14	増田　奈央子	ネガティブ感情が注意資源配分範囲に与える影響

15	丁　青	中国における自動車企業の環境マーケティング・コミュニケーション戦略の構築に関する研究―トヨタ自動車の事例研究として
16	中畑　義明	牛島謹爾に関する資料収集について
17	中尾　隆太	会計観と会計基準の関係に関する考察 －研究開発費会計に焦点をあてて－
18	呉　皖蘇	中国長江デルタと珠江デルタ主要部産業構造の変化と展望－人口と産業構造の関連より－
19	永吉　守	文化遺産としての行政建築をめぐる社会・文化的価値 －大牟田市庁舎の事例より－

３．日誌（２０２１年度）

２０２１年（令和３年）

４月２１日（水）　比較文化研究所運営会議
５月　７日（金）　比較文化研究所運営会議（書面）
１０月　６日（水）　比較文化研究所運営会議

２０２２年（令和４年）

２月１７日（木）　比較文化研究所運営会議（書面）
２月２５日（金）　比較文化研究所会議（書面）
３月　７日（月）　比較文化研究所協議会（書面）
３月２５日（金）　比較文化研究所運営会議

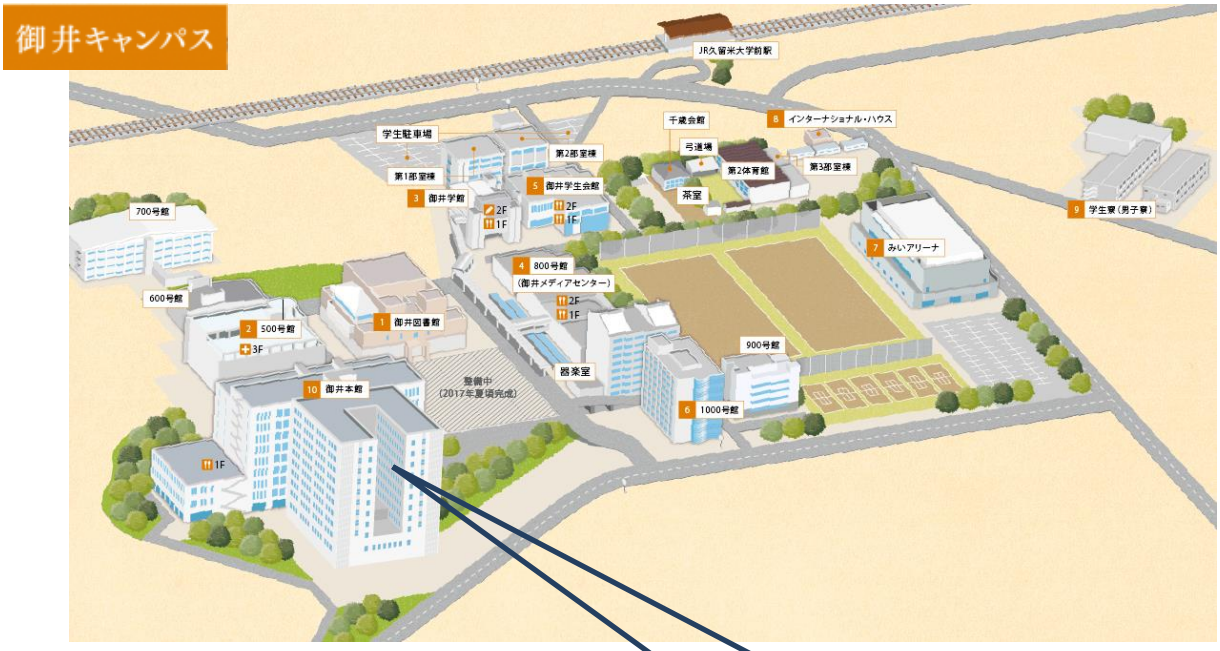
※部会活動を除く

施設・設備

比較文化研究所は、1987 年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館 3 階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された 1989 年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2015 年 3 月に現在の御井本館 8 階に移動しています。研究所の部屋は 3 室あり、それぞれ研究所長室、会議・研究会用、および資料室・作業室として使用しています。

研究所の資料室には、紀元前 3 世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する図書が保管されています。これは、元佐賀テレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待されます。

［案内図］



御井本館　８階
○比較文化研究所長室
○研究室
○共同研究室